

大学における英語教育再考

— こども学部英語科目を手がかりに —

岩 本 裕 子

要約

ゆとり教育を受けた世代を大学へ迎えたためか、日本の中等英語教育が疲弊しているためか、英語科目を受講する学生の英語力低下は著しい。本学短大英語科当時の必修英語科目受講生の英語力レベルから、短期大学部英語コミュニケーション科改名（2003年）以降の学生の英語力（英語科目ではなく「異文化理解」などの講義科目を通して）低下は否定できなかった。

こども学部開設以来2年間、選択英語科目（英語コミュニケーションA/B/C）を教えてきた担当者として、大学での英語教育のあり方を再考したい。単に本学学生の英語レベル検討にとどまらず、日本における英語教育のあり方への問題提起とする。本学学生は保育実習現場、卒業後の就職先で、幼児早期英語教育の現場に立ち会うことだろう。幼児英語教育の是非、「英語苦手症候群」を公言して憚らない多くの日本人を生み出す日本文化のあり方など、「大学における英語教育」再考は日本文化への問いかけに発展していかざるをえない。

キーワード 大学教育、早期英語教育、コミュニケーション能力

目次

1. はじめに
2. 大学における英語教育のあり方
 - 2.1 「ゆとり教育」世代を迎えた大学の英語教育
 - 2.2 資格試験受験指導と大学教育の目的のずれ
3. こども学部英語科目の現状と展望
 - 3.1 保育現場で必要とされる英語への誘導
 - 3.2 誕生日月をつづれない学生への指導
 - 3.3 語学力向上から知的好奇心養成へ：ディズニーは万能薬？
 - 3.4 「日常会話」という思いこみ是正指導
4. 日本における早期英語教育議論の現状
 - 4.1 英語は幼児から？小学校でなぜ英語？
 - 4.2 高校英語の授業、英語でできるの？
 - 4.3 「英語が使える日本人」は育つのか？
5. おわりに

1. はじめに

こども学部創設記念号（2008年3月『浦和論叢』第38号）に、「西洋精神の起源をめぐる一考察 — 映像に描かれた聖書・神話・伝説 — 」を投稿した筆者は、2008年度前期に2年目の歴史入門の講義において、拙稿をふまえてさらに充実した講義を展開することができた。そこで「歴史入門」同様に本稿では、こども学部で担当している英語科目3科目を通して論考をまとめてみることにした。その出発点は同論文の註〔2〕であった^{〔1〕}。

創設初年度（2007年度）は、非常勤に依頼した英語コミュニケーション（以下「英コミュ」と略記）C（日常会話）を、2008年度から筆者が教えたことで、創設2年で英語科目3科目すべてを教え終わった。英コミュA（こどもの文化）と英コミュB（アメリカ事情）については、2年間で2回教えた。初年度の反応から、次年度には講義内容大幅変更を余儀なくさせられた英コミュAと比べて、英コミュBは逆に2007年度の成功により、さらに発展させ成功したなど、2年間の授業を検討することによって、大学における英語教育のあり方の再考を試みたい。

本論展開にあたって、筆者が作成した担当3科目の「授業のねらい・到達目標」を列挙しておく。3科目とも半期1単位（演習）の選択科目、配当年次は全学年である。作成したのは、すでに3年前になるが、2006年に作成した「授業のねらい」において、すでに本稿のタイトル「大学における英語教育再考」の問題点を含んでいることがわかる。特に注目に値する部分には実線を引いた。点線部分は後の議論にもつながっていく用語である。

【英語コミュニケーションA（こどもの文化）】

英語は世界の人々とのコミュニケーションにもっとも使用される言語である。英語が母国語でない国においても、英語はまるで地球共通語のように、コミュニケーションの手段となっている。次世代の初期教育に携わる幼稚園教諭が「英語が苦手」などとは言っていない。幼児に接する上で、自信を持って教育に携われるような「こどもの文化」に精通した英語コミュニケーション能力修得を目標とする。

【英語コミュニケーションB（アメリカ事情）】

英語は世界の人々とのコミュニケーションにもっとも使用される言語である。英語が母国語でない国においても英語は、まるで地球共通語のように、コミュニケーションの手段となっている。英語の基礎力に自信がある学生もない学生も、「アメリカ事情」という文化に根ざした「生きた英語」を学習する。使えなければ「言語」としての意味をなさない。アメリカ文化を学習することによって英語能力を身につけることを目標とする。

【英語コミュニケーションC（日常会話）】

英語は世界の人々とのコミュニケーションにもっとも使用される言語である。英語が母国語でない国においても英語は、まるで地球共通語のように、コミュニケーションの手段となっている。「日常会話」はどの程度の英語力でこなせるようになるのだろうか。英語の基礎

力に自信がある学生もない学生も、「日常会話」という一見簡単そうに思えるレベルの英語力養成を目標に、英語学習に挑戦しよう!!

2. 大学における英語教育のあり方

2.1 「ゆとり教育」世代を迎えた大学の英語教育

2007年（平成19年）に大学に現役入学した学年が「ゆとり教育」受講初年次生となる、と筆者は思い込んでいた。つまり平成生まれ（1988年：昭和63年4月2日～1989年：平成元年4月1日の学年、あるいはその翌学年）をして「ゆとり教育」を受けた「ゆとり世代」と称するのだ、と単純に思っていた。ところが、本稿執筆にあたって、参考文献一覧にあるような、教育関連の書籍を読むうちに、自分自身のあいまいさを痛感することとなった。

「ゆとり教育」とは、従来の詰め込み学習内容を以前よりも縮小した教育のことを言い、国営企業の民営化を推し進めた中曽根内閣の主導のもとにできた臨時教育審議会（臨教審）で、「公教育の民営化」という意味合いで導入された^[2]とのことである。さらに「ゆとり世代」とは、義務教育においてゆとり教育を受けた世代のことを言うが、その定義はあいまいとしか言えないようである。

元文部官僚で、ゆとり教育の推進者として知られ、多数の著書を通して私見を明らかにしている寺脇研によれば「ゆとり教育が始まる移行措置が開始された2000年度に小学校に入学した、1993年4月2日～1994年4月1日生まれがゆとり第一世代にあたる」として、マスコミによって別の世代がゆとり第一世代と喧伝されていることを指摘している^[3]。筆者はマスコミによる喧伝を鵜呑みにしていたことを自覚した。

規定の前後はあるとしても、すでに「ゆとり教育」の弊害が叫ばれて久しく、見直しが始まっていることは事実である。見直しの対象となる小学生たちが進学してくるまで、大学はこれから10年余り、ゆとり世代の教育に携わることになる。

大学での外国語教育のあり方を、本学を例に考えてみよう。21世紀を迎えるに至って、従来の外国語教育を存続させることは、非常に困難な状況になっている。1987年創設の本学（呼称は浦和短期大学、英語科と経営科の2学科）では、第一外国語の英語に加えて、もう一カ国語いわゆる第二外国語を受講するのは当然であった。英語科では第二外国語の選択肢は減ったとは言え、2007年度廃科に至るまで守り通すことができた。最終的には、フランス語、中国語、韓国語の3カ国語となったが、ドイツ語、スペイン語を含んで選択肢が5カ国語だった時期もあった。

経営科において、英語が苦手な学生たちに第二外国語は厳しい、と判断したため、英語そのものも第二外国語の一つになるという状況に変わっていった。すなわち第一外国語として英語が存在し得なくなった、ということだった。このことは、浦和大学こども学部の語学教育状況を議論する3.1においても同種の議論が展開されることになる。アルファベットに拒否反応を示す学生にとって、フランス語やドイツ語、といった新しく出会う言語への寛容性はほぼ持ち合わせる余裕がないばかりか、中学高校と少なくとも6年間学んできたはずの英

語に至っては、拒否どころか「嫌悪」の情を持つ学生すらいたのは、ただ経営科のみならず、福祉系の短大を増学科した際にも起こった現象だったようである。こども学部の実状に関しては3.1で言及する。

2.2 資格試験受験指導と大学教育の目的のずれ

「日本ほど英語検定試験の受験者の多い国はない。ではいったい何のため？各試験の内容を詳細に分析し、本当に必要な英語力を探る」と『TOEFL・TOEICと日本人の英語力：資格主義から実力主義へ』の表紙に惹句が載っている。著者は、英語教育に関する著作を多く執筆して、本稿第4章の論点である幼児（早期）英語教育には、一貫して反対の立場を表明している鳥飼玖美子^[4]である。本稿執筆においても、単に本学こども学部での英語教育検証にとどまらず、日本における英語教育の実態を整理する必要から、鳥飼による多数の著作を参考とした。註として直接引用しなくても、議論の土台とした鳥飼を始めとする英語教育論者たちの著作は参考文献一覧として残した。

日本における英語教育に関する文部科学省を踏まえた議論に関しては、4.1で改めて整理する。本節では資格試験受験指導という英語教育と、大学での英語教育の目的を確認しておきたい。前掲書のタイトルにも含まれるTOEFL（Test of English as a Foreign Language: 外国語としての英語テスト）とTOEIC（Test of English for International Communication: 国際コミュニケーションのための英語能力テスト）が、現在ほど社会的に浸透していなかった1990年代前半、本学（浦和短期大学）に勤務し始めた筆者には、資格試験指導を大学がするとは思っていなかった。資格を得たいと思うものが自学自習するもので、語学専門学校ならまだしも、いわゆる「ノウハウ」を大学で教えたり、単位の対象としたりする時代ではなかった。

他方、1963年に設立した財団法人日本英語検定協会（Society for Testing English Proficiency, STEP）が運営する英語検定試験、いわゆる「英検」は文科省の「お墨付き」がなくなることで受験生が動揺している。英語検定試験に関しては1990年代前半の英語科学生なら高校生の頃に3級くらいまでは受験し「英検2級取得」を目的に入学していた。準2級を設置したばかりの頃である。そのうち時代の要請に応じて、英語科でも英検対策授業を設けて単位化するようになった。

当時は春と秋の2回、本学を会場として、本学英语科学生（経営科からも受験者あり）が数十名受験することが通常となった。1990年代後半は実施していた学内受験も、21世紀に入って以降学内受験者は激減して学内での実施が叶わなくなっていった。この英語科廃科までの4年間（2004～2007年度）、学科長として最後の英語科学生たちの指導にあたった筆者は、英語科の英語能力の衰退を目撃し続けたことになる。

科目の多様化を試みた1990年代後半当時の英語科学科長の発案で、TOEFL・TOEIC対策授業も新設され単位化された。この科目は英検のクラスと異なり、留学やワーキングホリデー希望者たちが受講した。中国からの留学生で英語力の高い学生が加わることもあった。筆

者が学科長だった時期にも無謀ながらこの科目を残した。科目受講者は授業の成果として、TOEFL・TOEICを受験させるべく学生に指導するよう授業担当者に依頼したが、現実には受講学生から受験者は1名も出なかった。単なる単位取得にとどまり成果が上がったとは思えなかった。

本節では、鳥飼の前掲書を通した議論を意図していたが、本学短大時代からの資格試験受験指導を回顧することで多くの紙幅を費やしてしまった。資格取得を目的とした科目設定が本学（短大）英語科でなされたことは触れたが、すでに資格取得した学生に対してその資格に合わせて単位を与える例を紹介しておく。

長谷川論文において「英語が国際語化しつつあるとはいえ、TOEFLやTOEICの点数向上を達成目標として教育を目ざしている国はそれほど多くないということも結論できる」としたあとに「中学～大学における現行の英語教育が必ずしも成果を上げていないこと、また、アジアの先進国・地域の中で遅れをとっているという事実は読みとることができる」と但し書きを加えた際に、「絶対評価」の例を脚注で紹介している。「英語能力検定試験（外部試験）で一定の成績をおさめた場合に、英語授業科目の単位認定を受けることができる制度が確立している」と述べた上で、長谷川の本務校である岡山大学の具体例をあげている。ここに再録しておく。「英検準1級」「TOEFL 500点以上」「TOEIC 586点以上」のいずれかを満たした場合に「英語A」の単位を4単位、また「英検1級」「TOEFL 550点以上」「TOEIC 730点以上」のいずれかを満たした場合に「英語A」の単位を8単位取得したものとして認定を受けることができる^[5]とのことである。

鳥飼の前掲書は、資格試験に関する「根本的な疑問に答えてくれる本」^[6]という編集者の依頼に応えたものだった。「結局、大切なのは、目的を定めることである」と始まる『「資格試験」の効果と限界』の節で、「人間がもっている能力の、ほんの一端を測るのが資格試験であり、1回の試験で自分のすべてが試されるわけではない」と言い切っている^[7]。つまり彼女の主張は、資格試験合格とか高い得点取得などは、一面的なことで、最終的にはその個人における英語能力の活用方法にかかっている、ということではないだろうか。

「終章」において、英語だけが言語ではないことを強調した上で「ユネスコ（国連教育科学文化機関）によれば、世界で6000前後ある言語のうち、約半数が消滅の危機にある」とする。「少数言語も尊重し、異文化に敬意を払うような感性をつちかうことなく、英語検定試験だけに注目することで、他文化・多言語時代に対応する真の国際性が生まれるとは思えない」と強調する。現在の日本、あるいは日本人に求められることを「異なった言語や文化を持つ多様な人々との共生を可能にする異文化コミュニケーション能力」としている^[8]。

本稿註4で言及した通り、筆者は高校時代に鳥飼玖美子を知った。いかにして彼女が同時通訳者となったかという趣旨の本を読んだと記憶している。その著作ですでに彼女は、通訳になるために必要なことは英語だけでなく、中学3年間のすべての勉強であり、中学高校の勉強で何一ついらない勉強はない、と書いていた。当時の高校生に好き嫌いなく真面目に勉強することを説いた彼女は、その主張を変えることなく、さらに強化して英語を勉強するこ

との真の意味を問いかけているように見える。

単なる検定資格取得や高得点獲得がいかに表面的なことか、言語（英語）を学ぶことの真の意味は、異文化を理解する力であることを痛感する。筆者が「理解力」と解釈した「コミュニケーション能力」に関しては、3.4で用語の再確認をした上で、第4章の「日本の早期英語教育議論」でも検討していく。

3. こども学部英語科目の現状と展望

3.1 保育現場で必要とされる英語への誘導

2007年度こども学部創設によって、英語科目担当者となることが決まった筆者は、一つ覚悟をした。こども学部にとっての英語科目はかつての呼称でいえば「教養科目」であること、自分自身は教養課程に位置づけられた仕事をするようになったと肝に銘じた。自分の研究専門領域とは畑違いの学部（理工系学部、経済学部など）教養課程で英語を教えている業界（アメリカ史研究）の友人たちは多い。筆者の場合、英語を教える経験は本務校のみだった。非常勤では自分の専門領域であるアメリカ史やアメリカ文化を教えることはあっても英語を教えた経験はなかった。

英語を教える経験は本学のみだったということである。すなわち単位のために「いやいや」受講する学生に英語を教えた経験はなかった。学生の能力の優劣は別としても、浦和短期大学英语科の教え子たちは皆、英語を「好き」だった。「好きこそ物の上手なれ」とはよく言ったもので、英語科の教え子たちのほとんどが、素直に真面目に勉強したものだだった。

筆者の教壇歴初年は、本学がまだ浦和短期大学（1987年開学）と呼ばれていた1989年だった。非常勤で英語科目を教える機会を得て、本学の短大英語科2年生に専門科目（選択）のLL英語を教えた。今となっては「語学力の原点は聴力」を教壇で発信する出発点であったことを実感する。その2年後の1991年に専任教員として勤務して以来、必修か選択かの区別はあるものの、短大生に様々な英語科目を教えてきた^[9]。

「はじめに」で整理したように、こども学部創設以来2年間、担当科目の3種類の英語科目を一通り教え終わった現在、その現状を整理して展望を描く必要に迫られているように思う。科目名を再確認する。英語コミュニケーションA（こどもの文化）、英語コミュニケーションB（アメリカ事情）、英語コミュニケーションC（日常会話）の3種類で、外国語科目の他の選択肢は、中国語と韓国語である。すでに 2.1で、短大経営科に関して言及した事実と同じ現象が、こども学部においても起こっている。

筆者の英語科目を受講する学生はまだ望みがあるようで、「英語は嫌い」と公言して、中国語と韓国語で外国語科目の単位を取得した学生もいることは残念なことである。こうした学生はただ、漢字を含むとはいえ「新しい言語に挑戦しよう」というだけあって、保育の専門科目では優秀な成績を残している女子学生もいて、彼女たちから「英語は苦手です」と申し訳なさそうに言われると、筆者としては返答の言葉もない。

ところが2年目を迎えた2008年度前期に2度目の英コミュ A（こどもの文化）を終えて以降、

こうした学生に対して「英コミュ Aはディズニーがテーマだから楽しんで英語を勉強できるよ」と声をかけるようになった。学生の反応は判で押したように「えっ、ディズニー？来年受けます！」だった。2008年度前期開講した2度目の英コミュ Aと初開講の英コミュ Cに関しては、3.3で言及するとして、本節においては初年度の英コミュ Aで経験した筆者にとっての「異文化体験」を整理しておきたい。

短大英語科では、1冊のテキストを半期で終了していた。英語科目、なかでもリスニング科目は、テキストに即して先週の学習確認のために、毎回授業開始時に小テストをした。学生たちは嫌がったが、毎回の小テストが効果を表し始めると、頑張ることが楽しくなるようで、3ヶ月後の半期終了時には相当の英語聴力を獲得する学生を出すことができた。英語力向上には確認テストは必須事項である。文法や講読科目においても、学期半ばに2回程度の中間テストを行った上で、さらに最終試験で英語力向上を確認した。テストのためであろうと、勉強すれば力がつくのは当然のことで、これらの科目も半期終了時にはそれなりの成果を得て、単位取得していく学生がほとんどだった。

こども学部において、テキスト使用とか毎回の小テストといった作業が絶望的であろうことは容易に予想できた。何より、学生たちが拒絶反応を示した。筆者は彼らの英語基礎力を確認することすら恐ろしかった。英コミュ Aという科目名で、実質は中学レベルの英語を教えるという事態を避けたかったのである。英語科当時においても、選択科目で自主的に英語力不足の学生、あるいは中国からの留学生を対象とした補習目的の英語科目は存在した。筆者の担当科目ではなかったが、こども学部の英コミュをそうした科目にはしたくなかった。

30名余りの受講生に最初の授業で行ったのは、「力試し問題」への再挑戦だった。2007年入学生（こども学部1期生）のオリエンテーション時に、学力全般を確認するための「力試し問題」を実施したが、作問者は筆者だった。国語、算数、一般常識問題、時事問題、保育関連問題（これは学部会議での検討を経て）などで、当然英語問題を含ませた。その英語問題だけを再録する形で、教材を作り再挑戦させた。学期途中で再度確認した上で、最終試験でも範囲として出題した。次頁の問題Ⅰがそれである。

次頁の前期末試験をみれば、どういう講義をしたかは理解できると思う。筆者としては不本意だったが、半期終わった結果、成果は「語彙を増やした」ことだった。発信したのは、本節題「保育現場で必要とされる英語への誘導」だった。

- Ⅱ. 幼稚園や保育所の通信に必ず記入される日付と曜日を書きなさい。
- Ⅲ. 幼稚園のクラス名になる可能性のある次の花の名前を書きなさい。
- Ⅳ. 幼稚園のクラス名になる可能性のある次の果物の名前を書きなさい。
- Ⅴ. 前期の講義で、あなたのボキャブラリーは十分増えたことでしょう。
ジャンルを越えた次の単語の英語や日本語を書きなさい。
- Ⅵ. 講義で習った次の日本語を英語表現で書きなさい。
- Ⅶ. セっかく覚えたあの単語が問題に出なかった・・・と残念がっているあなたのために以下にスペースを作りましたので「挽回点」を獲得して下さい。

中学高校以来の「悪習」でがむしゃら暗記したものの出題されなかったと悔しがる学生のために問Ⅶを設定したのは、こども学部が初めてではない。浦短英語科以来の「伝統」で、このガス抜きによって、学生も勉強したことが形に残る満足感もあるし、採点する筆者にも合格点に達しきれなかった学生に単位を出す「言い訳」にもなる。「書いた」満足感が学生にさらに勉強する気持ちを育てるものと確信している。単位のための受講ではなく、講義終了以降も英語を勉強する気持ちを維持させることこそ筆者の最終試験の目的だからである。

【試験例】2007年度英語コミュニケーションA前期末試験

I. 力試し問題を覚えていますか？最後の挑戦です！頑張ってください！

1. A : B = C : D になるように () に適当な英語を入れよう。

- ① day : night = () : left
- ② mouse : mice = datum : ()
- ③ book : books = () : phenomena
- ④ wife : husband = niece : ()
- ⑤ thick : thin = () : inferior

2. 次のカタカナを英語にすると？

- ① インターネット () ④ チーズ・バーガー ()
- ② アシスタント () ⑤ レストラン ()
- ③ ソーセージ ()

3. A : B = C : D になるように () に適当な英語を入れよう。

- ① safe : safety = wise : ()
- ② uncle : aunt = hero : ()
- ③ more : less = senior : ()
- ④ full : empty = better : ()
- ⑤ see : sea = wait : ()

4. 次の英語の意味と同じ単語を書きなさい。

- ① a book we use when we don't know the meaning of the words ()
- ② a very large animal with a long nose ()
- ③ the day which comes after Wednesday ()
- ④ the biggest animal in the ocean ()
- ⑤ the first month of the year ()

II. 幼稚園や保育所の通信に必ず記入される日付と曜日を書きなさい。

記入例：6月6日（日）→ June 6, Sunday

- ① 3月3日（金）() ④ 9月4日（火）()
- ② 5月7日（月）() ⑤ 11月5日（木）()
- ③ 7月9日（土）()

Ⅲ. 幼稚園のクラス名になる可能性のある次の花の名前を書きなさい。

- ① アネモネ () ④ 桜 ()
 ② タンポポ () ⑤ ゆり ()
 ③ ひまわり ()

Ⅳ. 幼稚園のクラス名になる可能性のある次の果物の名前を書きなさい。

- ① バナナ () ④ りんご ()
 ② いちご () ⑤ みかん (mandarin)
 ③ ぶどう ()

Ⅴ. 前期の講義で、あなたのボキャブラリーは十分増えたことでしょう。

ジャンルを越えた次の単語の英語や日本語を書きなさい。

- ① eggplant () ⑪ チョコレート ()
 ② ひざ () ⑫ pumpkin cake ()
 ③ cheek () ⑬ 英文法 (English)
 ④ 鮎 () ⑭ lice ()
 ⑤ Mercury () ⑮ 美しい ()
 ⑥ ブルーベリー () ⑯ soy sauce ()
 ⑦ soar () ⑰ 保育所 ()
 ⑧ 海王星 () ⑱ Venus ()
 ⑨ The Beauty and the Beast (←ディズニー映画)
 ⑩ 復活祭 (イースター) () ⑲ 幼稚園 ()
 ⑳ marriage ()

Ⅵ. 講義で習った次の日本語を英語表現で書きなさい。

- ① 早起きは三文の得 (2)
 ② 昼食を楽しんで！ (2) ←レストランで注文したものが運ばれたとき言われる表現
 ③ 個性的であれ！ (1) ←トニー賞授賞式での男優の受賞発言で聞いた表現

Ⅶ. せっかく覚えたあの単語が問題に出なかった…と残念がっているあなたのために
 以下にスペースを作りましたので「挽回点」を獲得して下さい。

Good Luck ! 070730hi

3.2 誕生日月をつづれない学生への指導

初年度（2007年度）の英コミュ Aを終了して、保育現場で使うことになるであろう様々な語彙（vocabulary）を増やすことには成功したと筆者なりに満足したつもりだった。だが学生たちには、浦和短大英語科での授業方式同様に、途中で行った小テスト（毎回ではない）や中間テスト、最終試験が想像以上に負担だったようで、後期科目となった英コミュ B受講生は激減した。「試験をする科目」という評判が受講生の減少を呼んだらしい。

前期は30名を超えた受講生が、後期には10名を切ってしまった。しかも彼ら（ほとんどが男子学生だった）は、前期の履修者でありながら、前期のような試験をすることを歓迎してはくれなかった。わずか10人と言うことで、短大時代のゼミ（1年の教養ゼミ、2年の専門ゼミ）で行った方式を用いてみることを学生に提案すると、食指を動かし始めた。つまり、英コミュ Bがアメリカ事情というタイトルであったことから、受講生が各自好きなアメリカ映画（ハリウッド映画）を1本選んで、映画紹介のレジメを作成した上で、発表した後に、担当映画のもっとも印象的だった場面を7分から10分見せる、という方法だった。見せると言うより、全員で英語を聴く、ということで英語の授業の目的を達成させたかった。

この授業では、短大時代以上の「知」の広がりを確認でき、英語の授業方法としての可能性も実感できた。ヒップホップ好きやダンスサークル部員が受講生のなかにいたことによって、発表映画が黒人音楽や黒人映画になることが多く、アメリカ黒人女性史が専門領域の筆者にとっては、英語の授業というより、他大学でのアメリカ文化、アメリカ史、本学短大時代で言えばアメリカ研究、あるいは英コミュ Bの副題そのものでアメリカ事情の講義で話してきたことにも通じた。英語力向上ではなく英語への興味拡大には成功したと言えるだろう。この成功を受けて、翌2008年度後期にも同様の方法で授業を展開した。受講生は2007年度を大きく上回り30人を超え、受講生発表映画一覧は、68頁の一覧表右部分の通りである。

受講生による映画発表という方法を用いて、次年度（2008年度）の英コミュ Aはディズニーをテーマとして「満員御礼」となるのだった。この現象に対する筆者の対応は、次節3.3で展開することにして、本節ではこども学部生の英語力への対応例を整理する。2年目（2008年度）を迎えて、避けて通れない学生の実体解明を始めることとなった。それが本節題となった「誕生日月をつづれない学生への指導」である。

中学1年生で習ったはずの月名、曜日名を、完璧にはつづれない学生が受講生のなかに少なからず存在したことを確認した。英語以外の学習では力不足を感じさせない学生が、彼の誕生日（Novemberだった）をつづれなかったときには絶句した。せめて誕生日くらいつづってほしい、と望みながら、白板に曜日と月名を書く欄を19枠（7日と12ヶ月）作り、19人の有志を迎えて書かせることにしている。つづりの間違いがないことを確認して、ここから「本当の」講義を始めるのだった。

まず、月名はかつて10ヶ月だったが、太陽暦（ユリウス暦）の12ヶ月に変わったこと、2ヶ月増えたため、ユリウス（Julius Caesar）の誕生日をJulyで加え、もう1ヶ月は養子オクタウィアヌス（Octavianus）が受けた尊号アウグストゥス（Augustus）を取ってAugustが

加わったことを説明する。その導入に使うのが、10月（October）と蛸（octopus）だった。8本足の蛸の名前にもある8を意味する 'oct' がなぜ10月になるのか、という疑問をわかせてから、7月と8月の2ヶ月が挿入されたために、7→9、8→10、9→11、10→12と後半の4ヶ月は名前がずれたのだ、という話である。

本稿執筆が5月大型連休までかかったため、筆者には前代未聞の「異文化体験」を加筆しなければならなかった。前述した月名の意味を講義で話すことは多いが、そのたび教室のあちこちから「へえ〜」が聞こえたものだった。その声はそのまま彼らの「知の広がり」となり、勉強の楽しさを実感して次の段階へ上がってくれたものだった。この話を2009年度前期にしたのは英コミュC（日常会話）のクラスだった。ところが、いつもの「へえ〜」はまばらで、大半がキョトンとしていた。なんと、シーザー（カエサル）を知らない、という。こうなると、英語力の話ではなくなる。ゆとり世代を迎えた異文化体験で筆者ができることは、ひたすら「知の力」を実証することである。翌週には、カエサルの胸像の写真を回覧させ、目で覚えさせることにした。前途多難である。

月名の次には曜日名にも、知の力を伝えることにしている。62頁の【英仏語における曜日名の由来一覧】にあるように、単に英語にとどまらず、まず仏語で曜日名を書き出し、ローマ神話（ギリシャ神話）との関連を紹介する。仏語を先にするのは、銀河系宇宙の惑星名にも通じるローマ神話（ギリシャ神話）に気づかせたいためである。このことは、歴史入門の講義ノートとして書いた紀要前稿^[10]でも言及した。『セーラームーン』をきっかけに講義が思わぬ方向へ進んだ、というエピソードである。

こうした英語つながりではない異文化理解への誘導説明をして受講生の興味を広げた上で、その後英語の曜日名に含まれる意味を話していく。仏語がラテン系神話に基づいていたように、英語は、ゲルマン系、北欧系の神話に基づいていることを知らせる。北欧神話とは、古代ゲルマン人が信じた開闢（天地の始まり）神話のことで、受講生たちにはギリシャ神話ほどにはなじみがないかもしれない。曜日名を巡る詳細は由来一覧表にまとめた^[11]。

曜日名に直接関係ないが、北欧神話関連で一般常識レベルの例を一つだけ残したい。2009年日本公開映画『ワルキューレ』（Valkyrie）で改めて周知されたが、映画『地獄の黙示録』（Apocalypse Now: 1979, 2002年日本公開『特別完全版』Apocalypse Now Redux: 2000）で米軍によるベトナム北爆場面で、ワグナー（Richard Wagner）の♪ワルキューレの騎行が用いられていたことは有名である^[12]。北欧神話ではバルキューレと呼ばれ、オーディン（Odin）神に仕える侍女たちの一人である。このオーディンこそが、英語の水曜日（Wednesday）の元になるウォーデン（Woden）で、アングロサクソンの主神である。彼は侍女ワルキューレを使って、戦死した英雄たちの霊をバルハラ（ワルハラ）神殿に導かせたのだった。

古代ローマの政治家であるシーザーの存在を認識できていないゆとり世代に対して、以上のような説明がどこまで通じるか不安ながら、「語り継ぐ」ことを諦めてはならない。英語学習の究目的が「異文化理解」であることを常々講義で話す筆者には「使命」でもあると思

う。2.2の結論で鳥飼玖美子の言葉「異なった言語や文化を持つ多様な人々との共生を可能にする異文化コミュニケーション能力」を引用したことと同様である。

【教材例：正解記入済み】

保育現場では「園だより」など連絡に日付は必ず記入しますね。そのとき英語を使うことも。試験のためでなく自分のために使える英語を身につけましょう！

1月	January	7月	July
2月	February	8月	August
3月	March	9月	September
4月	April	10月	October
5月	May	11月	November
6月	June	12月	December

日曜	Sunday
月曜	Monday
火曜	Tuesday
水曜	Wednesday
木曜	Thursday
金曜	Friday
土曜	Saturday

水星	Mercury
金星	Venus
火星	Mars
木星	Jupiter
土星	Saturn
天王星	Uranus
海王星	Neptune/Poseidon
冥王星	Pluto

【英仏語における曜日名の由来一覧】

曜日	英語	由縁	仏語	由縁
日曜	Sunday	Sun	dimanche	manche?
月曜	Monday	moon lunatic→	lundi	
火曜	Tuesday	北神) 軍神ティウ Tiu's	mardi	ロ神) 戦いの神マルス 天) 火星 Mars
水曜	Wednesday	ゲ神) ウォーデンの日 アングロサクソンの主神 (知識、文化、戦争、死者の神) Woden 北神) オーディン Odin	mercruedi	ロ神) マーキュリー (商売の神) ギ神) ヘルメス (ゼウスとマイアの子で幸運 富裕の神) 天) 水星 Mercury
木曜	Thursday	北神) トール (雷、戦争などの神) の日	jeudi	ロ神) ジュピター ギ神) ゼウス 天) 木星 Jupiter
金曜	Friday	北神) 愛の女神フリッグ オーディンの妻	vendredi	ロ神) ビーナス ギ神) アフロディテ 天) 金星 Venus 仏) vendre 売る*
土曜	Saturday	ロ神) サトゥルヌスの日 農耕神	samedi	ロ神) サトゥルヌス ギ神) クロノス Cronus ゼウスの父で、世界の支配者 天) 土星 Saturn

ゲ神) ゲルマン神話 北神) 北欧神話 ロ神) ローマ神話 ギ神) ギリシャ神話 天) 天体用語
*金曜日はユダがキリストを「売った」日だからの説もある。イエスの十二使徒の一人ユダは、ローマ最高法院から銀30枚を受け取り、イエスを引き渡す(売る)約束をしたのだった。

3.3 語学力向上から知的好奇心養成へ：ディズニーは万能薬？

2008年度の英コミュ Aがディズニーをテーマにしたことは、すでに何度も言及してきた。2009年度前期もすでに開始しているが、2年目にして「ディズニーは強し！」を実感せざるを得ない状況、定員ぎりぎりの50名受講となっている。英コミュ Aが「こどもの文化」とタイトルされているため、試しにテーマをディズニーにしてみたのだが、筆者の予想以上に受講生のディズニーへの期待も満足度も大きかったようである。

FD委員会が行う2008年度前期の授業アンケート^[13]で、筆者の該当科目は英コミュ Aだった。40名以上の受講生で不満はほとんどなく、授業への満足は当然ながら、自ら調べ物（発表準備のレジメ作り）をした充実感も伝えられた。レジメを作るという「宿題」をしている自分自身に満足したようだった。小学生以来宿題をした経験がない女子大生だったが。わずかに不満を伝えたというか「無い物ねだり」をした学生からのコメントは「英語力をつけるような試験を含んだ勉強をしたかった」あるいは「授業前半に行われる教員からの英語指導の時間がもっとほしかった」とあった。こうした学生が自主的にサークル結成に至り、英語勉強サークル（レモンの会）活動を始めている。顧問は当然ながら筆者である。

前置きはこれまでとし、英コミュ Aのテーマである「ディズニー」をどのように学生に伝えていったかをまとめておく。本来こども学部では、後期選択科目「アメリカの生活と文化」の講義テーマの1つであった。文部科学省提出シラバスとは微妙な調整をして、学生に人気のあるテーマを3つ加えて開講以来2年間講義して好評を得た。その3つとは「ヒップホップ」「自由の女神」そして「ディズニー」である。浦和短大2学科（英語科と経営科）共通選択科目であった「比較文化」を担当した5年間でもっとも人気の高かったテーマを「アメリカの生活と文化」に組み込むこととしたのだった。

「自由の女神」はアメリカ文化の重要な一端を担っているし、世界遺産の視点からも欠かせないテーマだった。「ヒップホップ」は黒人史への導入として英語科2年生限定専門科目「アメリカ研究」以来講義してきたテーマである。「黒人音楽の源流をたどる」という壮大なテーマの導入（黒人霊歌までたどる方法でヒップホップを出発点とした）には有効だった。ところがテーマ「ディズニー」は「怪我の功名」としか言えない。19年間勤務した本学で筆者が休講した経験はわずか1回のみ、2003年10月初旬だった。「比較文化」補講を5時間目に設定したが、積極的に学生に出席を促せるためのテーマに「ディズニー」を選んでみた。なんと受講生の全員の参加で盛り上がり、担当者の筆者以上の熱気を受講生からもらった。

「怪我の功名」と称したのは、筆者にとって「ディズニー」は講義テーマにはしないものだったからである。ただし講義の経験がなかったわけではない。2002年度立教大学集中講義の非常勤を引き受けて、2002年度前期に1回と9月初旬の集中講義で1回、合計2回の「ディズニー講義」を経験した。当然だがアメリカ研究者としてアメリカ文化の視点からの講義だった。本稿はディズニー議論が本意ではないので、これ以上言及しないが、立教大学の集中講義で筆者に非常勤依頼を出してくれた友人が2008年度に観光学部（新座キャンパス）学部長となって、同じようなディズニー企画科目を設定したため、再び筆者は2回講義する機

会を得た。

立教大学観光学部での第1回目担当講義の当日配布レジメから、講義導入に用いた「質問」及びその正解を以下に再録する。英コミュ Aでの教材ではQ5は用いなかった。Q5以外の質問は、短大科目だった比較文化の講義の産物である。

【「ディズニー」に関する質問及び正解と解説】

- Q1. 世界にいくつディズニー・テーマパークがあるかわかりますか？
 Q2. 世界で最初のディズニーランドが西暦何年にできたかわかりますか？
 Q3. ミッキーマウスの誕生年が西暦何年かわかりますか？
 Q4. 『美女と野獣』の主人公の名前をつづれますか？何語かわかりますか？
 [Q5. 能登路雅子『ディズニーランドという聖地』（岩波新書、1990年）を知っていますか？]
 Q6. 『ダンボ』が公開されたのは西暦何年かわかりますか？
 Q7. ディズニー・アニメ史上初の歴史逸話は何かわかりますか？
 Q8. TDRのアトラクションの映画化が何本あるかわかりますか？
 Q9. アニメと実写の合成映画『南部の唄』のテーマ曲を知っていますか？
 Q10. 『ナショナル・トレジャー』を見たことはありますか？

A1. 世界にいくつディズニー・テーマパークがあるかわかりますか？

→ 【ディズニーをめぐる拙稿1+2】に惑わされて5カ所なら不正解。2008年現在世界に6カ所

1 Disneyland Resort (Orange County, Anaheim, California: July 17, 1955)

2 Walt Disney World Resort (Orland, Florida: Oct. 1, 1971)

※3 Tokyo Disneyland (April 15, 1983)

4 Disneyland Paris (Paris, France: April 12, 1992)

※5 Tokyo Disney Sea (Sep. 4, 2001)

6 Hong Kong Disneyland (Sep. 12, 2005)

米奇老鼠 Mickey Mouse 維尼熊 Winnie the Pooh

米尼老鼠 Minny Mouse 灰姑娘 Cinderella

A2. 世界で最初のディズニーランドが西暦何年にできたかわかりますか？ 1955年

A3. ミッキーマウスの誕生年が西暦何年かわかりますか？ 1928年生まれ

A4. 『美女と野獣』の主人公の名前をつづれますか？何語かわかりますか？

Belle もちろん仏語で「美女」の意味、映画で「ボン・ジュール」と歌ってたはず

[A5. 能登路雅子『ディズニーランドという聖地』（岩波新書、1990年）を読んだことは？]

A6. 『ダンボ』が公開されたのは西暦何年かわかりますか？ 1941年

A7. ディズニー・アニメ史上初の歴史逸話は何かわかりますか？ ポカホンタス

A8. 「カリブの海賊」「ホーンテッド・マンション」「南部の唄」

A9. 映画『南部の唄』のテーマ曲 ♪ Zip-A-Dee-Do-Dah

A10. アニメばかりがディズニー映画ではない。

ディズニーを講義する直接の契機は、2002年度立教大学集中講義だったが、講義内容を充実、発展させたのは浦和短大講義「比較文化」だった。そのうちディズニーに関する原稿を依頼される機会もあり、これら拙稿2種類を以下に再録する。

【ディズニーをめぐる拙稿1】

「ディズニー家」出典：樺山紘一編『ヨーロッパの名家101』（新書館、2005年）

「ディズニー」という言葉から多くの人が連想するのは、テーマ・パーク、映画、ミュージカル、ミッキー・マウスやドナルド・ダックなどの様々なアニメ・キャラクターなどであって、創設者のウォルト・ディズニーその人ではないだろう。

ウォルトは1901年に父イライアスの四男としてシカゴに生まれ、中西部のあちこちを点々とした後で、三男の兄ロイを頼って1923年にロサンゼルスへ出た。当時未開拓領域であったアニメ映画を作り始め、今日のウォルト・ディズニー社の礎となる映画会社を設立して、28年にはミッキー・マウスを主人公とした初トーキー・アニメ『蒸気船ウィリー』を完成させた。その後ディズニー社は次々アニメ映画を発表して、30個以上のアカデミー賞も受賞した。

映像世界に留まらないウォルトの夢は、ファンタジーの世界を現実世界に作ることに広がった。1950年代には発展期を迎えていたテレビ界と接点を持ち、ABCテレビと番組製作契約を結び、カリフォルニア州に夢の王国ディズニーランドを完成させたのは1955年だった。ウォルトの故郷ミズーリ州マーセリンを模したとされる「メインストリート」の一角には、父親の看板「イライアス・ディズニー 建築請負業 1895年創業」が掲げられている。

ウォルトが生前最後に携わり遺作ともなったアトラクション「カリブの海賊」は、映画『パイレーツ・オブ・カリビアン／呪われた海賊たち』となって大ヒットした。ウォルトの死後5年目の1971年にはフロリダ州にディズニーワールドが開園し、その後日本に2つ、フランスに1つ、と世界に5箇所のディズニー・テーマパークが、ウォルトの夢を具現して、子供ばかりか大人をも惹きつけて止まないファンタジーの世界を提供している。「ディズニー」はディズニー家とは一線を画した巨大な組織となってしまったようである。

【ディズニーをめぐる拙稿2：修正前／アンダーラインは編集者依頼で削除した部分】

「ディズニー映画を考える ― 『南部の唄』から『ホーンテッド・マンション』まで ―」

出典：NEC広報誌『コンセンサス』7／8月号（2004年7月）

海外旅行に出かけた人数が昨年を上回ったと、成田空港の様子などが伝えられた今年の大連型連休だったが、国内で圧倒的な人気を誇った行楽地と言えば、ディズニーのふたつのテーマパークだろう。日本の2箇所を含んで世界に5箇所存在するディズニー・テーマパークは、子供ばかりか大人をも惹きつけて止まない夢の世界となっている。

大型連休中に公開された数多くの映画の中でも、ディズニーランドの人気アトラクション

を映画化したホラー・コメディ『ホーンテッド・マンション』は、大当たりしていたようである。「カリブの海賊」というアトラクションをモチーフとした映画『パイレーツ・オブ・カリビアン／呪われた海賊たち』に続く作品となっている。

全世界で632億円を稼いだ『パイレーツ』は、ジャック・スパロウ役で主演のジョニー・デップがアカデミー賞主演男優賞候補にもなって話題を呼んだ。ディズニーランドのアトラクションを眺めるだけでは想像もつかない筋書きで、なかなか見応えのある作品になっていた。すでにパート2と3が同時に制作される企画が進んでいることも納得できる。

髑髏に2本の剣がクロスした、いわゆる海賊マークを改めて見ると、公開時には連想もしなかったが、イエール大学の学生クラブ「スカル&ボーンズ（髑髏と骨）」を思い出してしまうのは皮肉なものである。現ブッシュ大統領（父親も当然！）も大統領選対抗馬民主党候補ジョン・ケリー（JFK！）も仲良く同じ学生クラブ出身だというニュースがもてはやされているため、ついつい余計な連想に走ってしまった。ディズニーに話を戻そう。

「カリブの海賊」は、ウォルト・ディズニー個人が大幅に関わった最後のアトラクションで、彼の死後2ヶ月後にオープンした、まさに遺作でもある。ミズーリ州マーセリンで幼年時代を過ごしたウォルトは、同州カンザスシティでアニメ製作会社設立に失敗して、俳優だった兄ロイを頼って1923年にハリウッドに渡った。今日のウォルト・ディズニー社の礎となる映画会社を設立して、生涯の友ミッキー・マウスを主人公としたトーキー・アニメ映画『蒸気船ウィリー』を完成させたのは1928年である。デビュー作に登場した頃のミッキーは白手袋なしだったが、生まれたての初代ミッキーは、素足に素手であった。ミッキーが長編映画で初主演をしたのは、クラシック音楽とアニメの融合映画『ファンタジア』（1940）だった。

真珠湾攻撃による第二次世界大戦参戦のために、公開時の注目度が下がってしまった『ダンボ』（1941）はアカデミー主題歌賞を受賞した。ウォルトの生涯で32個のオスカーを受賞したほど、アカデミー賞での評価も高かった。『美女と野獣』（1991）や『ライオン・キング』（1994）のように、映画から発展してブロードウェイ・ミュージカルとしても大ヒットしているものもあって、テーマパークにも負けない人気を誇っている。

ディズニー映画の題材としては、最新の『ファインディング・ニモ』（2004）のようなフィクションが従来のテーマだったが、ディズニー・アニメ史上初めて歴史逸話を題材にしたのが、長編アニメ通算第33作目の『ボカホントス』（1995）だった。英国最初の北米植民地ジェームズタウンが建設された地域にいた先住民ポーハタン族の族長の娘を主人公にしている。さらにビクトル・ユゴーの名作『ノートルダム・ド・パリ』のアニメ化『ノートルダムの鐘』（1996）、ギリシャ神話の英雄を描いた『ヘラクレス』（1997）、中国の伝説の少女を主人公とした『ムーラン』（1998）等、世界中の子供たちの夢を提供してきた。

各世代によって慣れ親しんだ作品は様々に異なるだろうが、日本ではレンタル・ビデオ店のキッズ・コーナーには大抵置いてある作品の中で、合衆国では発売禁止になっている映画がある。ディズニーランドのアトラクションで言えば、「スプラッシュ・マウンティン」の

原型となり、アカデミー主題歌賞受賞の♪ジッパ・ディ・ドウ・ダーが有名だろう。終戦の年である1945年に制作された、アニメと実写の合成という画期的技術が結実した作品『南部の唄』である。南北戦争前（奴隸制時代）の南部が舞台で、黒人のリーマスおじいさんが子供たちに語って聞かせる動物逸話なのだが、この映画に描かれている黒人のイメージが差別的であるとして公開当時に上映禁止運動が起こり、現在はビデオ発売を禁止されている。

最初に触れた『ホーンテッド・マンション』の主人公家族が黒人だったことに驚きを示した観客もあったようだが、ハリウッド映画での黒人の描かれ方は1990年代に大きく変わり始めた。従来は助演や脇役止まりだったが、『南部の唄』のようなステレオタイプで描かれることはほとんどなくなった、と言ってもよいレベルまで来ていると思う。

ウォルトの夢の具現であったカリフォルニア州アナハイムにあるディズニーランドが開演したのは1955年だった。彼の夢は限りなく膨らみ、永遠に変化し続けることをテーマとした未来都市エプコット・センターを持つフロリダ州のディズニーワールドの完成を待たずして、ウォルトは病に倒れたのだった。彼が存命なら絶句したかもしれない程の圧倒的な勢いで巨大化するウォルト・ディズニー社は、映画配給会社ミラマックスをも配下に入れている。同社配給のドキュメンタリー作品『華氏9・11』が配給禁止になった。『ボウリング・フォー・コロンバイン』で2003年3月、イラク戦争真っ最中のアカデミー賞授賞式で最優秀ドキュメンタリー賞を受賞したマイケル・ムーア監督によるブッシュ大統領批判の新作とあっては、弟が州知事であるフロリダ州では受け入れる寛容性はないのだろう。

拙稿2は修正後（下線部分削除によりできた紙幅でディズニーの説明を加筆）出版されたものを講義教材としている。アメリカの生活と文化ばかりでなく英コミュAでも教材とした。拙稿は2004年発行のため、2005年9月に開園した香港ディズニーランド（HDL）に言及していない。さらに発展した質問は64頁の【「ディズニー」に関する質問及び正解と解説】に詳しい。

英コミュAでは、これら予備知識を共有した後に、ディズニー映画（アニメばかりかピクサー社を含むディズニー社制作映画全部を対象とする）に関する受講生の発表に入ることになっている。受講人数の関係から1人1本という時間的余裕はなく、2人～3人で1本にして共同発表をさせた。2008年度の発表映画一覧は以下の通りである。邦題ではなく原題リストである。合わせて、同年度後期科目英コミュBのリストも合わせて一覧とした。すでに言及した通り、2007年度英コミュBが映画発表という方法をとったので、その方式は2008年度も採用した。2008年度分の発表映画リストを並列した。

「教師からの導入作品」の＊印を入れた映画群に関しては、配布教材を読ませたり、解説する段階で筆者から紹介した。中でも⑤の『魔法にかけられて』（Enchanted, 2008）は、ミュージカル映画の中で歌われた曲♪Happy Working Songを主人公の女優が歌うという2008年2月のアカデミー賞授賞式での場面を見せることで、受講生の志気を盛り上げることにしている。

【2008年度受講学生の発表映画原題例一覧：映画制作年順】

英語コミュニケーションA（前期）

＊教師からの導入作品

1. Snow White and the Seven Dwarfs (1937)
 2. Pinocchio (1940)
 3. Fantasia (1940) ＊①
 4. Dumbo (1941)
 5. The Song of the South (1946)
 6. Cinderella (1950)
 7. Alice in Wonderland (1951)
 8. Peter Pan (1953)
 9. Sleeping Beauty (1959)
 10. One Hundred and One Dalmatians (1961)
 11. Mary Poppins (1964) ＊②
 12. Beauty and the Beast (1991)
 13. Aladdin (1992)
 14. The Nightmare before Christmas (1993)
 15. Lion King (1994)
 16. Pocahontas (1995) ＊③
 17. Toy Story (1995)
 18. Monsters, Inc. (2001)
 19. Chicken Little (2005)
 20. Lilo & Stitch (2002)
 21. Ratatouille (2007) ＊④
 22. Enchanted (2008) ＊⑤
-
23. Freaky Friday (2003)
 24. Pirates of The Caribbean (2003) (2006) (2007)

英語コミュニケーションB（後期）

＊＊教師からの導入作品

1. A Clockwork Orange (1971)
2. Gremlins (1984)
「メジャーリーグ」シリーズ
3. Major League (1989)
4. Home Alone 1 (1990)
5. Home Alone 2 (1992)
6. Sister Act (1992) ＊＊←教員のモデル発表
7. The Mask (1994)
8. Casper (1995)
9. Spy Kids (2001)
「オーシャンズ」シリーズ
10. Ocean's Eleven (2001)
11. Ocean's Thirteen (2007)
「ワイルド・スピード」シリーズ
12. The Fast and the Furious (2001)
13. 2 Fast 2 Furious (2003)
14. Drumline (2002)
15. 8 Mile (2002)
「スパイダーマン」シリーズ
16. Spider-Man 1 (2002)
17. Spider-Man 2 (2004)
18. Spider-Man 3 (2007)
19. Bad Boys 2 Bad (2003)
20. The Devil Wears Prada (2006)
21. Charlie and the Chocolate Factory (2005)
22. Hairspray (2007)
23. Disturbia (2007)
24. Transformer (2007)
25. Dr. Dolittle 3 (2006)

3.4 「日常会話」という思いこみ是正指導

ことも学部英語科目で最後に残した英コミュCに関して検討することで、本章をまとめる。英コミュCが教えるべき内容とされている「日常会話」について考えてみたい。英語で言うなら survival English だろう。カタカナの「サバイバル」で通じるようになっている日本社会で「生き残ること」の意味合いの強い単語を用いていることを確認しなければならない。「日常生活」なら daily life とか everyday life と表現するのに、「日常会話」となると「生き残り」が求められるということである。生き残るために必要な英語力とは、どの程度のことを言うのだろうか。

「はじめに」で確認した「授業のねらい・到達目標」の英コミュCの一部を再録する。強

調した下線も伏したままとする。

「日常会話」はどの程度の英語力でこなせるようになるのだろうか。英語の基礎力に自信がある学生もない学生も「日常会話」という一見簡単そうに思えるレベルの英語力養成を目標に、英語学習に挑戦しよう!!

英語に限らず外国語会話能力を測るときに日本人がよく用いるのは「日常会話ぐらいならできる」という表現である。この場合は日本語の通じない外国での「生き残り」を意味するのだろう。観光旅行程度での「生き残り」なら問題ないのだろうが、この「日常会話ぐらい」がいかに難しいかは、海外滞在経験のある人なら誰もが痛感することだろう。

すでに本稿で繰り返し用いてきた「コミュニケーション能力」という日本語も確認しなければならない。英語ではcommunicative competenceと表現される。この概念は、1972年に言語学者デル・ハイムズ (Dell Hymes) によって提唱されたもので「文法などの言語的知識に加え、その知識を実際に運用する能力が含まなければならない」という主張だった。さらに1980年には、カネールとスウェイン (Michael Canale and Merrill Swain) は、コミュニケーション能力を4点にまとめた。1. 文法的能力 2. 社会言語的能力 3. 談話能力 4. 方略的能力である。以上の説明を行った鳥飼が誘導した結論は「ひとりの人間と言語との葛藤を、1回のテストで判断することは不可能に近い。言語というのは、そんなに生易しいものではない」ということだった。加えて英語検定試験の「限界」を強調した^[14]。

「一見簡単そうに思える」と筆者が「授業のねらい・到達目標」に書いた理由は、決して簡単ではないことを強調したかったことはすでに理解されるだろう。簡単ではないことを英語基礎力のない受講生たちに試みさせるためにどのような工夫をしているか、以下に列挙して各々簡潔に解説する。すでに議論を終えた「月名、曜日名」指導は2009年度は英コミュCで行った。「身体部位」を「絵に描く」ことから始めて可能な限りの身体部位を英語でどう表現するかを調べてくる宿題を出す。保育職をめざす学生にとって「絵に描く」ことは求められる条件の一つだと言うことを確認した後、各自のノート^[15]に自由に絵でまとめてくることを要求した。各自が思い思いに絵で描き上げ、身体部位を英語で表現した。

2009年度では宿題時点で要求した、手の「5本の指」の呼び名を始めとしてほとんどの身体部位が、学生たちによって白板に描かれていった。それらの呼び名に間違いはなかったが、ただ単語の暗記にとどまらせないために行った筆者からのコメントを2つ紹介したい。まず「ひじ」の部分に書かれた elbow に関して発音を確認させた。発音記号が [elbou] であることを知らせた上で単語を分解して弓状 (bow) の腕 (el) からできていることも確認する。[bou] と発音し、[bau] ではないことを徹底させる。同じ綴りで [bau] と発音する単語、さらに同音異義語も合わせて板書して確認させることを常としている。以下の通りである。

bow [bau] 「原義：弓のように曲げる」で「おじぎをする、頭を下げる」の意味。

bough [bau] (実・花のついた) 大枝 (豊饒の象徴)

bow (弓状) から発展させて必ず加える説明は以下である。「雨が降ったら見える弓」という意味で受講生が皆知る rainbow (虹) を分解して見せる。さらに「空にある弓」という

意味のフランス語を書き出す。l' arc en ciel カタカナで「ラルカンシエル」と言っても学生には通じる。こういう名称の日本の音楽グループがあるらしい。さらに以下に広げていく。

arc [ɑ:rk] 弓形、円弧、弧

ark [ɑ:rk] (聖書) ノアの方舟、(古・詩) 箱、櫃 (ひつ)

身体の部位で不足していた1カ所を最後に加えて説明を広げる。ひじではなく「ひざ」をめぐる話である。lapと表現する。[l] と [r] の発音の区別は授業では頻繁に話をするが、この単語も以下の2つの単語を例に発音を間違えると全く違った単語になることを周知する。

lap [læp] ひざ、(競技) 1周、1往復 ←lap time「ラップタイム」

rap [ræp] 軽くたたくこと、会話 (→rap music)

wrap [ræp] 包む ←日本語では「ラップ」「ラッピング」などすでにカタカナ

lapをさらに広げて、lap topとは何を意味するのかを知らせる。ひざに乗せて使用するもの、日本語になると「ノートパソコン」のことである。ノートパソコンは日本語なので、英語の日常会話では通じない。身の回りにあるカタカナを、英語の原義と日本語英語とを区別することの重要性も教えるために効果を示す単語の好例である。

こうして英単語で「遊ぶ」面白さを教えるのに、もっとも効果的なのは、Spelling Beeと合衆国では呼ばれている「つづり字コンテスト」だと誘導していく。詳細はすでに紀要論文において検討した^[16]。担当初年度だった2008年度前期において、Spelling Beeを提案し、受講生に歓迎されたため、昨年の第14回講義（最終試験の前の週であり註15で言及したノート提出日）で実施したSpelling Beeの出題問題を以下に転載した。

本稿第3章で検討した本学こども学部の英語科目において、共通して受講生に伝えることを最後にまとめたい。頭文字ACE（「エース」つまり「達人」）で表現される。語彙学習に必要な「Aha体験」を元に英語力（語彙力）をつけていく。「あっそうか」と気づいたら（Aha）すぐに辞書を引いて確かめ（Consult a dictionary）、辞書を通してさらに知識を広げていく（Expand a knowledge）方法である。紙の辞書よりも電子辞書を持つ学生が増えたが、紙の辞書すら持たない学生に授業では「辞書必携」を義務づけている。勉強は与えられるものではなく、自らつかみ取るものと納得させる。英語の授業内でできることはほんの一部であり、授業外での自主勉強こそが力をつける。いずれの勉強も最終的に自分1人であることを自覚させる。

【つづり字コンテスト ("Spelling Bee") 出題問題：教員控え】

2008. 7. 28.

Let' s Challenge "Spelling Bee" !

1st challenge : 日常的にカタカナでも使っている単語から

- | | | |
|-----------|----------|-----------|
| 1. book | 2. door | 3. school |
| 4. window | 5. table | 6. chair |

- | | | |
|----------|-----------------|-------------|
| 7. house | 8. food | 9. computer |
| | cf. hood / wood | |

10. kindergarten

2nd challenge : 動詞／形容詞／授業で覚えた数字と月名

- | | | |
|----------------|--------------|-----------------|
| 1. have | 2. work | 3. believe |
| 4. interesting | 5. beautiful | 6. incredible |
| | | cf. Mr.インクレディブル |
| 7. terrible | 8. three | 9. February |
| | cf. 発音要チェック | |

10. September

3rd and final challenge : 上級らしく間違えそうなものを3グループ

- | | | |
|---------------------|-------------------|---------------------|
| 1. <u>studying</u> | 2. <u>getting</u> | 3. <u>beginning</u> |
| 4. <u>hammer</u> | 5. <u>grammar</u> | 6. murmur |
| 7. <u>existence</u> | 8. playwright | 9. advice (n) |
| | 劇作家 | cf. advise (vt) |
| 10. marriage | 脚本家 | |

4. 日本における早期英語教育議論の現状

4.1 英語は幼児から？小学校でなぜ英語？

早期英語教育（early English education）とは、0歳から12歳の子どもの対象に英語を教える教育を総称した表現である。13歳つまり中学進学によって英語教育を受けるのが、従来の公立学校であったために、この年齢規定があるのだろう。本稿では当初、こども学部学生が実習先や就職先で遭遇するであろう、就学前教育（幼児教育）のなかでも特に英語教育に焦点を当てた議論をするつもりでいた。

就学前つまり0歳から5歳までの幼児英語教育を議論している場合ではないことが「研究史の整理」をするうちに、明らかになった。無数の書籍や論文が「早期英語教育」議論を展開している。本稿参考文献一覧では、こども学部英語科目関連ばかりではなく、英語教育関連及び「ゆとり教育」関連と広げつつも、無限の資料羅列は避けて、本稿執筆にあたって使用した参考資料に限定した。

幼児英語教育だけの議論であれば、保護者の意識段階で止められた。就学前幼児に英語教育を与えるかどうかは保護者の選択になる。公的な機関以外の塾などではなく、早期英語教育をする保育所や幼稚園を選ぶことは、それを肯定すると解釈してもよいだろう。単に保護者の選択に留まらない事態になったために、議論は無限に拡大することになったのだろう。「公立小学校への英語教育導入」に至るまでの経緯を時系列で73～74頁に整理しておく。

早期教育とは「標準とされる年齢に達する前から所定の教育を開始すること」^[17] となっ

ている。英語に関しては「標準」とされてきた13歳つまり中学進学での英語教育導入が適当かどうかの議論で問題になるとき、心理学用語としての臨界期（critical period）や敏感期（sensitivity period）といった時期が検討対象になる。アメリカ人女児ジーニー（仮称）の例を通して母語獲得には臨界期はあるとされるが、第二言語習得には臨界期はないと早期教育反対派は強調している^[18]。

「英語は幼児から？意見×異見」と題されて久保田競（日本福祉大学教授）と鳥飼玖美子（立教大学教授）との意見（異見）が『朝日新聞』（2004年11月1日）家庭欄に掲載された。元京都大学霊長類研究所所長であった久保田は脳の発達を考えた育児法を提唱している認知神経科学者だが、「脳発達期に刺激与えて」幼児期からの英語教育導入を薦めている。「国際社会で必要なのは、自分の考えを伝え、相手の意見を理解するための英語」（下線は筆者）として「英語で話しかけたときは英語で考えさせる」ことを重視した考えだった。

一方、本稿で頻繁に引用した鳥飼は「まず母語で自我形成を」として、基本は母語であることを強調する。英語学習開始最適時期は知的好奇心が芽生える小6から中1だとする。「文化は価値観、意見が違う中で、互いを理解し、折り合いをつけ、一緒に暮らしてゆく。それをまず大人が実践せずに、子どもに英語といっても、国際人の養成にはならない」（下線は筆者）と結論づけている。

この新聞記事が出た翌年2005年度から2年間、筆者は短期大学部英語コミュニケーション科1年生の必修科目「異文化理解」を担当した。英語科から英語コミュニケーション科に名称変更した2003年度設置科目だった。科目設置趣旨は「何のために英語を勉強するのか」を学生に考えさせるためだという筆者の理解から、毎回様々な議論のテーマを用意した。「英語は幼児から？意見×異見」はその一つだった。受講生から様々な反応が出てきた。納得できるものが多かったなかで、興味深い意見が出された。彼女は賛成派だった。「自分自身は中学のときにちゃんと勉強しなかったので、英語は好きだけど英語力はない。自分の子どもには幼児期から英語を勉強させて英語力のある子にしたい。親も私に幼児期から勉強させてくれているに越したことはない」という意見である。

2005年度短大1年生だった女子大生の意見は、4年過ぎたとは言え「今時の」親の代弁とも解釈できないだろうか。ここまでの議論で明確だろうが筆者は早期英語教育反対派である。結論から言えば、幼児教育によって子どもの英語力がつくわけではなく、この女子大生の英語力がないのは、本人も認めているように「ちゃんと勉強しなかった」ためである。当然のことながら、英語に限ったことではないが勉強しなければ力はいかない。問題外の議論だが、こうした考え方が早期幼児教育推進派の意見を「利用した」教育産業の「餌食」になっているとしか言えない。鳥飼も『危うし！小学校英語』で、第二章の章題を「『親の過剰な期待』が英語必修化への道を開いた」とつけ「文科省の陰謀？…コンプレックスを刺激された『親』との連携」と説明をつけている^[19]。

我が子に英語教育導入を考える親は、外部講師に「お任せ」では目的達成しないということ、自宅でも同様の環境を作り出す必要があることなど、自覚すべきだろう。ただそうした

環境が整ったとしたら、その幼児は母語である日本語も危うい日本人となる可能性があるだろう。4.3で再び議論の対象とする。「英語は幼児から？意見×異見」に戻って、下線部分に注目しておきたい。賛成派も反対派も到達目標は同じだと理解できるだろう。英語が何のために必要か、何のために英語を勉強するのか、というまさに短大英語コミュニケーション科「異文化理解」科目趣旨そのものである。

この新聞記事が出た翌月に、公開シンポジウム（2004年12月18日）「小学校での英語教育は必要ない：英語教育のあるべき姿を考える」（慶應義塾大学三田キャンパス）が開催された。その記録は、大津由紀雄 編著『小学校での英語教育は必要ない！』（慶應義塾大学出版会、2005年）となった。編著者である大津がシンポジウムを総括した「はじめに」で、8人の指定討論者に共通する論点として「学校英語教育のある時期に、文法や読解などの徹底した教育が必要である」こと、「母語である日本語（国語）の力の育成が重要である」こと、さらに「英語力と日本語力をそれぞれ別個のものとして扱うのではなく、それらの力が共通の基盤の上に築かれるべきである」ことが強調された。前述の筆者の議論に通じる。

「単なる反対のための反対ではなく、学校英語教育のあるべき姿を模索することに向いている」指定討論者たちに期待されることは「一般の方々にも理解できる形で提示する必要」性だと説いているのは心強い^[20]。早期英語教育導入に関しては、役人や学者の議論を「親」の視点まで持っていないことには、現実是不変である。「親」にもっとも近い存在となる保育者候補生たちに英語教育をする筆者にとっては、大きな課題でもある。

【ゆとり教育と公立小学校英語教育導入の経緯】

1972年	S47	日本教職員組合が「ゆとり教育」と「学校5日制」を提起
1980年	S55	教科の学習内容が少し削減された学習指導要領で「ゆとりカリキュラム」
1984年		中曽根政権のもと臨時教育審議会（臨教審）がゆとり教育の方針に取り組む。
1985年		プラザ合意（Plaza Accord）でG5によって合衆国の貿易赤字縮小、日本などの黒字国の内需拡大が決められた。この影響で「週休二日」の検討が始まった。
1991年12月		臨時行政改革推進審議会「小学校でも英会話など外国語会話を特別活動のなかで推進すること」答申提出
1992年	9月	第2土曜日が休業日
1995年	4月	第4土曜日も休業日
1998年		学習指導要領で「週5日制」告示→学習内容の3割削減＝「生きる力」を育てる「ゆとり教育」を2002年4月から開始。
2000年		「21世紀日本の構想」懇談会→これからの時代にコンピュータと英語が必須
2002年	4月	公立校完全週休2日制開始。英語は週3時間に戻る。ゆとり教育の実質的な開始 戦後7度目学習指導要領改訂。「総合的な学習の時間」新設「 <u>国際理解教育</u> 」 →国際理解に関する学習の一環としての外国語（英語）会話 →英語教育ではなく「 <u>英語活動</u> 」
2002年	7月	文科省包括的言語政策「『英語が使える日本人』の育成のための戦力構想」
2003年	3月	「『英語が使える日本人』の育成のための行動計画」発表
2003年12月		「2002年問題」と呼ばれ学力低下批判を受けた学習指導要領一部改正
2004年		経済協力開発機構（OECD）が学習到達度調査（PISA）結果を発表し日本の点数低下が問題となる。ゆとり教育見直しの可能性

2006年	
2007年	安倍政権のもと「教育再生」と称して、ゆとり教育の見直しに着手
2009年 4月	97%の公立小が何らかの英語教育を実施。6年生は平均で年に16時間程度。 試作版『英語ノート』（小学5／6年生を対象とした英語活動の「共通教材」） を全国の小学校に配布
2011年	小学5、6年生の「外国語活動」（英語）が新学習指導要領で必修となる。

【キーワード「小学校の英語」『朝日新聞』】

小学5、6年生の「外国語活動」（英語）は11年度からの新学習指導要領で必修となるが、今春から前倒しで実施してよいとされている。ただし、文部科学省の調査では、総合学習の時間などを使い、07年度時点ですでに97%の公立小が何らかの英語教育を実施。6年生は平均で年に16時間程度だった。出典：「小学校の英語教育：中学校の英語教員7割『英語話せる日本人増えぬ』：ベネッセ調査」『朝日新聞』2009年5月3日

4.2 高校英語の授業、英語でできるの？

早期英語教育なら現時点ではまだ「想定」の議論だが、本節で対象とする高校英語の改訂に関しては「間近」と思わざるを得ない。その改定案を再録しておく。

【[キーワード] 高校英語の学習指導要領の改訂案】

2013年度の新入生から段階的に実施の予定で、2003年度以来、10年ぶりの改訂となる。英語の科目は、コミュニケーション英語Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、コミュニケーション英語基礎などに再編する。「授業を実際のコミュニケーションの場面とするため、授業は英語で行うことを基本とする」と明記した。語句や文法は「実際に活用できるように指導する」とされた。高校で習得する英単語数は、現在の1300語から1800語に増やし、中学と合わせて3000語となる。

このキーワードは『朝日新聞』2009年2月1日第9面で、一面企画された「opinion 耕論：英語で授業 できるの？」に掲載されていた。ここで問題となるのは下線部分である。企画に参加したのは以下の3氏である。松本茂（立教大教授）、中西千春（国立音楽大准教授）、ダニエル・カール（タレント）。カールは山形県で、3年間ALT（Assistant Language Teacher）^[21]を経験したことがあった。「日本の英語教育は完璧主義になりすぎた」と苦言を呈しつつ高校教諭に英語の授業を英語ですることは「ちょっと心配」と言う。

松本は、中教審の外国語専門部会委員として検討にあたったそうだが、主眼は「英語で授業」ではないと言う。「英語でどうやって活動中心の授業をするか」だし、「2013年から1学年ずつ進め、全学年対象は15年」それまでに準備を、ということらしいが、日々の仕事をこなしながらどうやって準備をすればよいのだろう。しかも「高校におけるコミュニケーション重視の英語授業とは、英会話の授業ではない。日本語を介さずに大量の英文を読むのが基本」とのことである。大学教壇で英語科目を担当する筆者には言葉もない。

英語で英語を教えるどころか、すべての科目を英語で教える、という方法をとっている学校もある。2006年創設の本学併設中学校もその方式を採用して、受験生（正確には受

験生の親)には高い評価を受けているらしい。この教育をイマージョン教育 (immersion education) と呼んでいる。元々 1960年代にカナダのケベック地方で試みられたものである。フランス移民が中心のケベック地方で、カナダの標準語である英語を定着させるために、学校では英語で授業を行うことを実践することによって、子どもたちが二カ国語話者 (bilingual) になった、という経緯がある。現在、ケベック地方では仏英二カ国語を共通語としている。

生活上の必要性から起こったこうした試みを、現在の日本で急務でもない英語コミュニケーション能力が果たして進むのだろうか。二カ国語話者の代表と思われる帰国子女の場合も、現実には厳しいと言わざるを得ない^[22]。大切なことは、母語である日本語を正しく使えることであり、伝えたい (コミュニケーション) 自説が説得力があることであろう。伝える事実さえきちんとあれば、単語を並べるだけでも相手を説得することはできる。中身のない「流ちょうな」英語は「自己紹介」止まりが関の山である。これまで繰り返してきた通りである。最終節においても同様の議論になることと思う。

4.3 「英語が使える日本人」は育つのか？

73～74頁にまとめた【ゆとり教育と公立小学校英語教育導入の経緯】の2002年7月にある文科省包括的言語政策「『英語が使える日本人』の育成のための戦力構想」(以下「戦略構想」と略記)とは、次のようなことである。国民全体に求められる英語力とは「中学校、高等学校を卒業したら英語でコミュニケーションできる」、さらに、専門分野に必要な英語力や国際社会に活躍する人材等に求められる英語力とは「大学を卒業したら仕事で英語が使える」、さらに英語教員に求められる英語力も規定している^[23]。

「戦略構想」の位置づけを鳥飼の『危うし！小学校英語』では「中教審の『お膳立て』ぶり」との小見出しで、「『ゆとり教育』と『戦略構想』、この二つが合流して『激流』となったところで、いよいよ文科省が『小学校英語』実現に向けて大きく舵を切りました」^[24]と表現している。わかりやすい例えで、立ち向かうべきものは明確である。「今年がとことん議論をする最後のチャンス」と書き「未来を担う子どもたちの教育を決めるのは、私たち一人ひとりの責任」^[25]と強調する。この著書の出版年は2006年なので、「闘い」はすでに終了したのだろうか。

2009年3月に出版された「いま、英語教育全般がおかしい?! — 『英語が使える日本人』の育成のための戦略構想 (文科省) を問う」と題した山田雄一郎の提言で始まる『「英語が使える日本人」は育つのか? — 小学校英語から大学英語までを検証する』(岩波ブックレット)の帯には「起死回生の一手か? 天下の愚作か?」とある。「日本という国の教育を方向付けるべき文科省が、このような些末な目標に国民を誘導してはいけない」「義務教育課程は、どこまでも国民の基礎教育を標榜すべきで、いたずらに目先の結果を追いかけていては、国家百年の計を得ることはできません」「『戦略構想』は教育本来の理念を見失っている」^[26]という文科省批判が続く。もっともな批判だと思う。だが現実には、鳥飼が2002年3月

時点ですでに「もっと早く、もっと積極的に反対の論陣を張るべきであったと猛省」^[27]していた。こうした良識的な反対論者からの声も、文科省には届いているのかどうか、聞き入れられる気配はない。

文科省による指導要領に縛られる幼稚園から高校までの教育機関とは一線を画する大学の英語教育現場においては、文科省の縛りという軋轢よりも、文科省方針の「負の産物」とも言える「英語力のない」学生の英語指導という現実がある。英語力のない学生を迎えるたびに中等英語教育の疲弊が原因だと、単純に筆者は思いこんでいた。中高生徒のみならず、中高教諭も文科省方針の「犠牲者」であることを知った。その犠牲は「小学校で英語」の小学校教諭にも拡大している。さらには「小1プロブレム」対応策として、品川区教育委員会は園児・小学生一貫教育を2010年から実施することを発表した^[28]。

「英語が使える日本人」育成以前に、教育現場ですべきことがあることを文科省が理解できないのであれば、次世代を育てる「親」が賢明になることでしか日本を救う方法はないだろう。どの教育現場よりも頻度多く（送り迎えでほぼ毎日顔を合わせるはず）親に接する機会のある保育者は、大上段に振りかざす必要もなく、日々の暮らしの中で人間（日本人）として学ぶべきことは何なのかを伝え続けていくしかないように思う。

5. おわりに

本学紀要前稿の「歴史入門の講義ノート」に次ぐ、英語科目担当者の「授業覚書」のつもりで本稿執筆を決めた。その意図通り、第3章は副題にもあるように「こども学部英語科目を手がかりに」しながら、筆者の講義覚え書きを残すことができたと思う。だがすでに筆者は2002年3月に開催された浦和短期大学教育研修集会において、英語科教員として「映像を通して理解させる講義」と題して、英語力が十分でない学生たちに、単に英語力に留まらない「教養」部分に訴える英語の授業をしてきたことを報告した。それは「映像を通して理解させる講義 — 浦和短期大学教育研修集会英語科報告」（2002年6月『浦和論叢』第28号）として形にも残った。では同種とも言える本稿の執筆意義はどこにあるのか、第2章と第4章にその片鱗を見つけないといけない。

2002年3月の筆者報告時点では、本稿題目の一部である「大学における英語教育」の位置づけはまだ揺らいではいなかったと思いたい。その「再考」を問いかける本稿において、前稿から7年後の本稿特筆点は「ゆとり教育」世代（乱暴な表現だが単純に「平成生まれ」）を大学に迎え入れた事実を確認した第2章、英語に対する日本文化そのものが問われるような「早期英語教育」議論を踏まえた第4章、この2つの議論を本稿の意義としたい。特に第4章に関しては、参考文献一覧の「英語教育関連」の列举は氷山の一角にすぎず、反対派vs.賛成派という単純な議論に留まらない深刻な問題である。

大学教員（研究者）レベルの議論とは遠い位置にいるかもしれない「当事者」、つまり早期英語教育を選択するかどうかを迫られている就学前幼児を抱える保護者レベルに浸透しない現実の問題である。文部科学省や一部の「有識者」によって幼児英語教育が決められるの

ではなく、末端津々浦々の幼児の保護者たちにこそ、選択眼を持ってほしい、と思わずにいられない。我が子の教育に関して「お役所仕事」に任せる、あるいはいいなりになるのではなく、加えて「お役所」に責任転嫁するでもなく、我が子の教育を自ら考え続ける「保護者教育」こそ望まれている時期に入っているのではないか、本稿脱稿を目前にして、こう思わずにいられない。幼児教育に就く保育者たちは「保護者教育」者の側面も持つ。そうした保育現場の荒海へ漕ぎ出す保育者を教育する、本学こども学部への責任は重い。

本稿キーワード選択の段階で、「ゆとり教育」または「ゆとり世代」という日本語を入れたいと思った。その英訳を選ぶ際、減多に使用しない和英辞書を引いてみた。『プログレッシブ和英中辞典 第3版』（小学館、2002年）では3番目の「気持ちの余裕」の項目に「ゆとりのある教育」の英語表現があった。以下に引用する。"education that aims at development of individual talent rather than learning by rote [rout]"「丸暗記によるのではなく個人の才能の成長を助けることを目的とした教育」という意味らしい。確かにその通りである。この「崇高な」目的がありながら、なぜ「泥沼の」議論が繰り返されるのだろうか。現状を判断すれば、良識的な早期英語教育反対派の声は、国政に十分届いているとは言えない。政治が一般民衆と遊離して動くなら、幼児の保護者こそがこの良識的な意見を聞き入れる「良識」を持つ以外に道はないだろう。保育職の責任が求められる時代なのである。

註

- [1] 拙稿「西洋精神の起源をめぐる一考察 — 映像に描かれた聖書・神話・伝説 — 」2008年3月『浦和論叢』第38号（以下「西洋精神」と略記）, pp.42-43.
- [2] 日本財団HP <http://nippon.zaidan.info/seikabutsu/2002/01254/contents/732.htm>
- [3] 寺脇研『さらばゆとり教育：学力崩壊の「戦犯」と呼ばれて』（光文社、2008年）
- [4] 鳥飼玖美子は1969年人類が初めて月に降り立ったときの中継の同時通訳を担当していた。当時大学生だった彼女の偉業に驚嘆した筆者は、同時通訳という仕事にあこがれて大学進学を英文科に限定したのだった。以下に「月」をテーマとした拙稿を転載しておく。拙稿「月面着陸同時通訳」MOC Columns (Sep. 2008)：ウサギが餅つきをしているはずのお月さまに、アームストロング船長が人類の第一歩を標したのは1969年7月20日だった。このアポロ11号が持ち帰った「月の石」は、翌年の大阪万博の米国館に陳列された。そもそも宇宙開発を公言したのはJFKの就任演説だった。そのケネディの名を冠したフロリダ州の宇宙センターから、1970年4月11日13時13分打ち上げられたものの月に降りることなく地球に戻ってきたのはアポロ13号だった。"Houston, Houston, we have a problem!"と事故発生を知らせた先は、テキサス州出身のLBJ（ケネディ暗殺により副大統領から昇格）の名を冠したジョンソン宇宙センターだった。顛末は映画『アポロ13』となって、忘れかけた人々の記憶を呼び戻した。宇宙ステーション建設中の21世紀に、月面着陸はすでに昔話なのだろうか。あの宇宙中継の「同時通訳」という「神業」を目撃して「通訳」に憧れ上京した田舎娘は「英語は伝達手段。何を伝えるかが勝負。伝える内容を自ら生み出して！」と、大学教壇で日々学生を刺激することが生業となった。
- [5] 長谷川芳典「「英語が使える日本人」再考」『岡山大学文学部紀要』第38号（2002年12月）p.51本文及び註1.
- [6] 鳥飼玖美子『TOEFL・TOEICと日本人の英語力：資格主義から実力主義へ』（講談社現代新書、

2002年) p.160.

- [7] 同書p.118.
- [8] 同書pp.152-153.
- [9] 浦和短期大学勤務10年を経て、教育研修集会で筆者の講義の現状を報告したことが以下となって残った。「映像を通して理解させる講義 — 浦和短期大学教育研修集会英語科報告」2002年6月『浦和論叢』第28号.
- [10] 拙稿「西洋精神」p.33.
- [11] 森瀬りょう・静川龍宗『「北欧神話」がわかる：オーディン、フェンリルからカレワラまで』（ソフトバンク文庫、2009年）
- [12] 同書p.78-81. ワルキューレに関する詳細は以下拙稿を参照されたい。「クラシックをBGMに」拙著『スクリーンに投影されるアメリカ』（メタ・ブレーン、2003年）p.155.
- [13] 筆者から学生への回答は以下を参照されたい。『授業改善アンケートに対する教員所見集』2008年度前期 p.33.
- [14] 鳥飼前掲書pp.81-82.; 大津由紀雄、鳥飼玖美子『小学校でなぜ英語？－学校英語教育を考える』（岩波ブックレットNo.562、2002年3月）pp.32-34.
- [15] 英語コミュニケーションのクラスにおいては担当者手作りのノートを毎回配布して、各自のノート作り（ファイルにとじる）をさせている。最終試験の前週には完成ノートを提出させ、試験日には返却してこの「ノート持ち込み」による最終試験をすることを初回講義で了解させている。真面目な学生たちは、宿題用にと毎回複数枚のノートを持ち帰っている。ノートの完成度は単なる出席点以上の平常点の判断となり、試験の結果にも大きく影響する。2007年度前期の英コミュAでは、ノート持ち込みなしの最終試験としたことが大いに不評を買った「反省」から、2007年度後期の英コミュB以降、最終試験はすべて「ノート持ち込み」を続けている。試験でたっぷり書くことが学生たちの満足感にもつながるようである。
- [16] 拙稿「2006年黒人月間のマンハッタン報告 — 「ニューヨークにおける奴隷制度」展示を中心に — 」2006年12月『浦和論叢』第37号、pp.48-52.
- [17] 『広辞苑』第六版。
- [18] 大津、鳥飼前掲書pp.17-22.; 内田伸子「小学校一年からの英語教育はいらない：幼児期～児童期の『ことばの教育』のカリキュラム」大津由紀雄編著『小学校での英語教育は必要ない!』（慶應義塾大学出版会、2005年）pp.103-108.
- [19] 鳥飼玖美子『危うし! 小学校英語』（文春新書、2006年）p.39.
- [20] 大津由紀雄 編著『小学校での英語教育は必要ない!』（慶應義塾大学出版会、2005年）pp.11-12.
- [21] 鳥飼前掲書pp.131-145. JET（Japan Exchange and Teaching）プログラムという事業、「語学指導等を行なう外国青年招致事業」の略で、「外国語教育の充実」と「地方での国際交流の進展」という目的で1987年から行われている。このプログラムによって招致されたALTの現実の詳細が同書では知らされる。
- [22] 帰国子女も様々だろうが、筆者が教えた経験は国際基督教大学での非常勤（1995-96年度）だった。筆者の専門領域であるアメリカ黒人史を基礎に黒人文化を講義したのだが、同大学では異例の多人数（20名余り）受講生だった。その半数は帰国子女で、筆者の講義は日本語で行ったが、受講生に毎回何かしら書かせる用紙には英語で記入させていた。最終試験終了後、彼女たちが私のところへ来てこう言った。「講義を受けることで、自分の英語も日本語もいかに中途半端かということがわかりました。これから両言語ともに本気で確実に使いこなせるようしっかり勉強します」と。問題ない英語力を持つ彼女たちにとっても、単なる英語力ではなく「伝える内容」こそ必要

だとわかったようで、嬉しかった。

- [23] 山田雄一郎、大津由紀雄、斉藤兆史『「英語が使える日本人」は育つのか？ — 小学校英語から大学英語までを検証する — 』（岩波ブックレットNo.748、2009年3月）pp.4-5.；『「英語が使える日本人」の育成のための戦略構想の策定について — 英語力・国語力増進プラン — 』文部科学省ホームページ；『「英語が使える日本人」の育成のための戦略構想～大臣閣議後記者会見における文部科学大臣発言要旨～（2002/07/12）」文部科学省ホームページ
- [24] 鳥飼前掲書p.44.
- [25] 同書p.8.
- [26] 山田他前掲書pp.6-7.
- [27] 大津、鳥飼前掲書pp.2-3.
- [28] 『朝日新聞』朝刊一面（2009年3月26日）こども学部1年生必修科目スタディスキルにおいて学生に義務づける「プレゼン」（これもpresentationの発音表記に忠実なカタカナ呼称であれば「プリゼン」とするべきだろう）を開始するにあたって、教員からの模範プレゼンをした筆者はこの記事を扱った。「小1プロブレム」の種が就学前段階の幼稚園や保育所にあるという現実には、2009年度1年生は自らが「知力発信者」にならなければならないことを自覚したようだった。単に「子どもが好き」だけで保育者になりたいと思って入学してきた1年生は、保育職という仕事の責任の重さを痛感したようだった。プレゼンはプレゼンに留まらず、議論の発端であることも理解させ、各スタディスキルのクラスでは、毎回プレゼンを出発点にして議論する訓練が続いている。

【参考文献一覧：テーマ別】

1. こども学部英語科目関連

- ・能登路雅子『ディズニーランドという聖地』（岩波新書、1990年）
- ・能登路雅子「ディズニーの帝国：アメリカ製テーマパークの文化戦略」立教アメリカ研究所紀要『立教アメリカン・スタディーズ』第27号、2005年3月、pp.25-40.
- ・手塚治虫・野口文雄『手塚治虫とウォルト・ディズニー』（講談社、2005年）
- ・Disney FAN 編集部／編『ディズニーアニメーション大全集』（講談社、2008年）
- ・森瀬りょう・静川龍宗『「北欧神話」がわかる：オーディン、フェンリルからカレワラまで』（ソフトバンク文庫、2009年）
- ・拙著『スクリーンで旅するアメリカ』（メタ・ブレーン、1998年初版2002年再版）
- ・拙著『スクリーンに投影されるアメリカ』（メタ・ブレーン、2003年）

2. 「ゆとり教育」関連

- ・和田秀樹／寺脇研『どうする「学力低下」：激論・日本の教育のどこが問題か』（PHP研究所、2000年）
- ・寺脇研『格差時代を生きぬく教育』（KTC中央出版、2006年）
- ・寺脇研『さらばゆとり教育：学力崩壊の「戦犯」と呼ばれて』（光文社、2008年）
- ・荻谷剛彦、他『調査報告「学力低下」の実態』（岩波ブックレットNo.578、2002年10月）
- ・荻谷剛彦、他『格差社会と教育改革』（岩波ブックレットNo.726、2008年6月）
- ・荻谷剛彦、他『検証 地方分権化時代の教育改革「教員評価」』（岩波ブックレットNo.752、2009年3月）

3. 英語教育関連（HP・書籍・雑誌・新聞記事）

- ・『「英語が使える日本人」の育成のための戦略構想の策定について — 英語力・国語力増進プラン — 』文部科学省ホームページ

- ・「『英語が使える日本人』の育成のための戦略構想～大臣閣議後記者会見における文部科学大臣発言要旨～（2002/07/12）」文部科学省ホームページ
- ・鳥飼玖美子『TOEFL・TOEICと日本人の英語力：資格主義から実力主義へ』（講談社現代新書、2002年）
- ・大津由紀雄、鳥飼玖美子『小学校でなぜ英語？ ― 学校英語教育を考える』（岩波ブックレット No.562、2002年3月）
- ・長谷川芳典「『英語が使える日本人』再考」『岡山大学文学部紀要』第38号（2002年12月）pp.41-76.
- ・大津由紀雄編著『小学校での英語教育は必要ない！』（慶應義塾大学出版会、2005年）
- ・鳥飼玖美子『危うし！小学校英語』（文春新書、2006年）
- ・金谷憲『英語教育熱：過熱心理を常識で冷ます』（研究社、2008年）
- ・小山内大『〈クイズ〉英語生活力検定』（大修館書店、2008年）
- ・山田雄一郎、大津由紀雄、斉藤兆史『「英語が使える日本人」は育つのか？ ― 小学校英語から大学英語までを検証する ― 』（岩波ブックレットNo.748、2009年3月）

・山田雄一郎、斉藤兆史、江利川春雄「リレー連載：英語教育時評」全12回『英語教育』（*The English Teacher's Magazine*）April, 2008～March, 2009（以下タイトル一覧：4月号 外国人労働者の日本語研修；5月号 数字の暴力と幾何学模様の魔力；6月号 新学習指導要領の危うさ；7月号 北京オリンピックと『英語ノート』；8月号 矛盾だらけの教育再生懇談会提言；9月号 文科省の「完敗」と新指導要領の迷走；10月号 英語教師は、まず優れた英語の使い手たれ；11月号「教育再生」シンポジウム；12月号 小学校外国語活動と言語意識教育；1月号 小中連携の話；2月号 回想と展望；3月号 財界主権下の高校新指導要領）

-
- ・「英語は幼児から？意見×異見」『朝日新聞』2004年11月1日
 - ・社説「大学生の学力：まず入試から考える力を」『朝日新聞』2009年1月25日
 - ・「耕論：英語で授業 できるの？」『朝日新聞』2009年2月1日
 - ・「小1プロブレム対応」『朝日新聞』2009年3月26日
 - ・「英語教育：生活に密着した表現学ほう」『朝日新聞』2009年4月25日
 - ・「小学校への英語導入に賛成？」『朝日新聞』2009年5月2日（夕刊）
 - ・「小学校の英語教育：中学校の英語教員7割『英語話せる日本人増えぬ』：ベネッセ調査」『朝日新聞』2009年5月3日

Summary

Reconsideration of the English Education — Through the English Classes in the Faculty of Child Studies —

Hiroko Iwamoto

The purpose of this paper is to reconsider English education in Japan. Through my English classes in the Faculty of Child Studies (University education: 2007-2008), I want to think about the reasons why the English ability of Japanese students has deteriorated remarkably in recent years.

The Ministry of Education, Culture, Sports, Science, and Technology has decided to start a project "to make Japanese students become people who can use English perfectly." This project has been a target of arguments between pros and cons. The ministry has also decided that English education will be started not from junior high school but rather from elementary school (early English education). Is this project going to be effective?

This paper is one proposal regarding these discussions. My point at issue concerns Japanese culture and education. It goes without saying that language is a means of communication. We Japanese must reconsider what our communicative competence is.

Keywords University Education, Early English Education, Communicative Competence

(2009年5月14日 受領)